

Profile

京都府出身。2006年 滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士課程修了。滋賀県立大学地域づくり教育研究センター研究員を経て、13年より現職。風土に根差した地域固有の文化や生活史を踏まえた地域づくり、地域活性化、地域コミュニティ再生を目指す。



過去を育てて、未来をつくる

滋賀県立大学 地域共生センター
助教

上田 洋平
Yohei Ueda



Q 地域文化学とは？

A 伝統的な暮らしを学び、より良い地域社会を目指す。

地域文化学に求められているのは、人およびその社会と自然との相互作用によって形成された地域固有の生き方を総合的に理解することです。

近代化によって人と人、人と自然との関わりは大きく変貌し、さまざまな課題に直面しています。この状況の中、地域に根差した伝統的な暮らしや生き方を学ぶことで近代を相対的に再評価し、新しくより良い地域社会をつくることに取り組んでいます。私はこれを「過去を育てて、未来をつくる」と呼んでいます。



Q 現在の研究に取り組んだきっかけは？

A フィールドに出て人々の生きざまに触れたこと。

民俗学や歴史学に関心があり、当時、全国に先駆けて「地域文化学」を提唱した滋賀県立大学に入学しました。大学時代に取り組んだフィールドワークでお年寄りの話を聞き、地域に根差した昔ながらの暮らしや生きる術に触れることができました。同時にその知見が失われていくことに危機感を覚え、後生に伝えていく必要があると思ったのです。

その手段として考案したのが「ふるさと絵屏風」です。人々が五感で体験したことをアンケートなどで聞き取り絵図にまとめたもので、つくる過程を通して自身の地域の知恵と文化に気付くことができます。出来上がった絵図を見るとお年寄りは元気に語り始め、子供たちも寄ってきて耳を傾けます。絵図を媒介としてコミュニティが形成されることで、多世代の居場所ができます。

この取り組みがまちづくりの手法として滋賀県や同県内のいくつかの市町で採用された事例もあり、実際に制作した人々からアドバイスを受けて別の地域でも制作が始まるなど、各地に広がっています。



Q 地域に目を向けることで、見えてくる日本は？

A 「未病」から、健やかな社会へ。

子供のころは、野山を駆け回って育ったおばあちゃん子でした。そのためか、今でも趣味はお年寄りの話を聞くこと。仕事と趣味が密接しているのは幸せなことです。庭いじりも好きで、植物が生い茂る古民家に妻と娘と暮らしています。子供のころの体験が現在に結び付いています。

いじめや引きこもりなど、人と人との関係性の問題を抱える現在は、日本社会そのものが健康と病気の間にある「未病」のような状態にあると思います。いわば「つながりが病んでいる」。ならば「つながりで治す」ということで、多世代共創の取り組みを進めることによって、健やかな社会を取り戻していきたいです。